

定年退職の方々を送る

定年退職にあたっての想いと御礼

岩澤 康裕 (化学専攻 教授)

1984年4月に理学部に着任し、化学反応学講座(現物理化学講座化学反応学研究室)を担当させて頂いてから理学部・理学系研究科での25年間があったという間に過ぎて、今、万感の思いがいっぱいです。この間、特に評議員3年間と研究科長・学部長2年間の計5年間は幸せな達成感と悔やまれる無力感とが混在するとても忙しい期間でした。評議員の期間は、法人化をはさんでの変革の時期であり、中期目標・中期計画案作成、組織・運営改革、規則整備作成など多くの課題に委員の皆様方と一緒に取り組み、理学系研究科・理学部のたくさんの素晴らしい人々に出会い感動を覚えたのが昨日のようです。また、研究科長・学部長の期間は、法人化後の理学系研究科・理学部のあり方・存在感および将来への戦略の模索・試行、継続改革の時期であり、ここでも執行部の皆様や委員の皆様、専攻長・学科長・施設長、事務長をはじめ教職員の皆様の見識と知恵およびご協力で頭が下がるこ

とを何度も経験致しました。このような貴重な経験をさせて頂きまして大変感謝しております。一方、自分の非力さに無力感を味わい後悔することも度々あり、この点、皆様には誠に申し訳なく思っております。

理学系研究科・理学部は東大の頭脳と良心であると言われてきています。理学系研究科・理学部が東大から無くなったらもはや東大という大学では無くなるであろうとも言われます。しかし、現在のわが国を取り巻く教育・研究環境の変容、中身より見てくれの評価・実証主義、若者の理科離れなど、理学系研究科・理学部から見ると必ずしも心地よいものでないし力がでるような状況でないように思われます。また、悪貨が良貨を駆逐するような危惧さえ持ってしまいます。各人の本来の力を見せるべき時、発信すべき時だと思えます。また、組織や運営の課題・問題の解決に大胆に挑戦・英断することも大切と思えます。



1984年に恩師の後任として着任した時、化学教室の教授の皆様方は若輩者の私に、心の中で手を合わせた程に温かに接して下さい、全てを信頼し支援して下さいました。本当に有難く今でも感謝しております。今は同僚や学生を慮る余裕が無くなっているように感じます。最後になりましたが、理学系研究科の多くの方々、特に化学教室の先輩や同僚の皆様方から頂いたご支援、ご協力に對しまして、また、中央事務および教室事務の皆様方から頂いたたくさんのご教示、ご助力に對しまして、ここに改めて心よりの感謝を申し上げます。さらに、共に励んで下さった研究室の皆様にも深くお礼を申し上げます。

岩澤康裕先生を送る

瀧口 宏夫 (化学専攻 教授)

化学教室を通じた岩澤先生と私のお付き合いは40年前に遡ります。いわゆる東大闘争の直後に化学科島内研究室に入室したところ、隣の田丸研究室に「石坂浩二似の格好いい人がいる」という話を聞きました。しかし、岩澤先生はその後すぐに博士課程を中退して横浜国立大学助手に就任されたので、深くお付き合いする機会はありませんでした。昭和59年4月に講座担当助教授として理学部にお戻りになってからは、同じ若手の助

教授としてご一緒する機会が多くなり、理学部以外の経験がなかった私は多くのことを勉強させていただきました。

昭和61年1月に教授に昇任され現在に至っておられますが、その間、評議員、研究科長・学部長、スペクトル化学研究センター長を歴任され、独立行政法人化の荒波の中での研究科の舵取りという大任を見事に果たされたことは周知のとおりです。

ご専門は触媒化学、表面科学で、触媒表面の化学設計、原子分子レベル反応機構の解明、燃料電池触媒解析、時空間XAFS解析、表面分光法開発などの優れた研究成果により、日本化学会進歩賞、

日本IBM科学賞、井上學術賞、触媒学会賞、日本表面科学会賞、紫綬褒章、日本化学会賞を受賞(章)されました。

岩澤先生は長年にわたって日本学术会议会員を務められ、昨年には3部部長に就任されました。飄々としつつ核心をついたご発言で会議をリードされる岩澤先生は、慣性は大きいですが感性に欠ける(と私は思っている)わが国の学界にとってたいへん貴重な存在です。ご退任後は化学専攻、理学系研究科の枠組みを超えて、より高所から学界を牽引するお立場となられます。

岩澤先生の今後のますますのご活躍を祈念申し上げます。

良き先輩，良き後輩にめぐまれて

佐藤 勝彦（物理学専攻 教授）

1982年に京都大学から東京大学に着任してから26年余、振り返りみれば見る間にすぎた年月でしたが、素晴らしい人々と出会うことができ、充実した四半世紀をすごすことができました。着任当時の物理学教室には西島和彦先生はじめ星のごとく偉大な先生方がたくさんおられ、駆け出しの助教授にとっては教室会議で発言することも恐れ多い雰囲気でした。しかし着任から一ヶ月たったころの教室会議で年度末予算処理について議題になったとき、研究室の備品を購入する予算もなかったので、勇気を出して「新任の理論の教員にも研究室立ち上げの経費をいただけないか」とお願いいたしました。実験系の新任には立ち上げ経費が出ていましたが、当時理論系には出ていなかったのです。「オー、さすがは京大出身だ」とさる高名な先生から野次られながらも、たいへん新任の状況を理解していただきパソコンとプリンターを購入する経費を獲得しました。また当時は毎日、昼食は教授、助教授は山上会議所でひとつのテーブルを囲んでの昼食会で、緊張の連続ではありましたが先輩の先生方が深い物理学の見識を

持たれていることに感動したものです。

東大の最大の魅力はなんと言っても優れた院生と共に学び共同研究ができることです。この四半世紀の間に、高い研究のアクティビティを保てたのは素晴らしい若者に出会えたことによると感謝している次第です。この間、30余名の博士を送り出すことができ、いま彼らが東大、京大を始め全国の大学でそれぞれ傑出した特色ある研究を進めていることは私としては最高の喜びです。

在職期間中の嬉しい出来事といえば、第1はカミオカンデによる超新星ニュートリノ検出と小柴昌俊先生のノーベル賞受賞でしょう。私は院生の頃から超新星ニュートリノの理論的研究をしていましたが、現実それが検出され、しかも同じ物理学教室の“隣の研究室”で検出されたのでした。観測結果はニュートリノが短時間ではありますが星のコアに閉じこめられるという私のニュートリノのトラッピング理論と良く一致し、たいへんな幸福感に浸ったものです。カミオカンデのデータを当時院生であった鈴木英之さん（現・東京理科大）と共に研究室に泊ま



り込んで解析し、論文を書いたことも昨日のように思い出されます。そして私が研究科長を務めていた2002年10月、待ちに待った小柴先生のノーベル賞決定のニュースが入ってきました。その夜の記者会見、翌日の祝賀会などに忙殺された日も懐かしく思い出されます。第2は1995年物理学教室、天文学教室の研究者が申請したCOE拠点「初期宇宙研究センター」が認められ、さらに1998年には省令にもとづく「ビッグバン宇宙国際研究センター」が認められたことです。いま牧島センター長のもとに次の新たな発展のフェーズに向かおうとしています。今はこのような恵まれた環境の中で研究・教育にたずさわることができたことは、理学系の皆様のおかげと感謝の念でいっぱいです。ありがとうございました。

佐藤勝彦先生を送る

須藤 靖（物理学専攻 教授）

佐藤勝彦先生が平成21年3月末日をもって定年退職されます。佐藤先生は、巨視的世界の極限である宇宙の創生・進化を、微視的世界を記述する素粒子物理学と融合させて理解する「素粒子論的宇宙物理学」を開拓したことで世界的に著名な研究者です。大質量星の進化の最終段階である超新星爆発におけるニュートリノトラッピング、初期宇宙が指数関数的膨張を経験したとするインフレーション理論、宇宙の多重発生理論、など真に独創的な研究業績を数多く挙げられ

ています。それらに対して、平成元年に第5回井上學術賞、平成2年に第36回仁科記念賞を受賞、さらに平成14年に紫綬褒章を受章されています。

佐藤先生は昭和57年に東京大学理学部助教授として着任され、本学物理学教室で初めて本格的な宇宙理論研究室を立ち上げられました。平成2年に教授に昇任された後、理学系研究科ビッグバン宇宙国際研究センター長、理学部長・理学系研究科長に就かれたほか、学外においても、国際天文学連合宇宙論委員会委員長、日本物理学会会長、日本学術会議会員など数多くの要職を歴任されました。また、ご自身の幅広い学問的興味と好奇心・優れた物理学的センス・親しみやすい人柄を通じて、研究室の学生に大きな

影響を与え数多くの人材を輩出した偉大な教育者でもあります。私は修士課程から博士課程へ進学した際、佐藤研の最初の学生となり、以来25年以上にわたりお付き合いする幸運に恵まれました。

佐藤先生にあこがれて理学部物理学科に進学したという学生の声もよく耳にします。このように東京大学物理学科の看板とも言える佐藤先生が教室から去られるかと思うと、心にぽっかりと穴が空いてしまうような寂寥感を禁じえません。今後あらたな環境のもとで、さらなる研究のご発展とご活躍を心からお祈りいたします。最後に、物理学教室のみならず理学部の教職員と学生を代表して申し上げます「長い間本当にありがとうございました」。

もっと自由に

松浦 充宏 (地球惑星科学専攻 教授)

わが家の年賀状は家内がつくる。だから詳しいことは知らない。今年の年賀状には、私が43年間に在籍した東大をこの3月に退職すると書いたらしい。これが正しいとすると、学生時代も含め、実に40年以上も理学部・理学系研究科にお世話になったことになる。この間、学生時代の東大闘争、地球物理学科から地球惑星物理学科への改組、大学院重点化、関連4専攻の合同による地球惑星科学専攻の創設、21世紀COEプログラムの推進など、確かに色々なことがあった。それにしても40年、よく飽きなかったと我ながら感心している。

私は、スプートニク世代なので、子供の頃から科学者に憧れていた。科学者がどんなものか、どうしたらなれるのかまったく知らなかったけれど。高校時代に、素晴らしい物理の先生に出会って、自由に考えることの楽しさを知った。大学に入ってみたら、何だかお仕着せの授業ばかりで、つまら

なかった。それで、ホッケーをやったり、スキーをやったり、サッカーをやったり、自動車でアメリカ大陸を横断したり、学問以外のことに熱中した。大学院の途中から、自分で考え、自由に研究できるようになって、急に学問が面白くなった。それ以降は、学問一直線のような気がする。

私は、研究することも教えることも好きである。そのほかの仕事だって嫌いではない。ただ、締め切りは嫌いだ。不幸なことに、ほとんどの仕事には締め切りがある。だから、ほとんどの仕事は嫌いである。研究でも仕事でも、他人に指図されず、自分の納得いくまでやりたい。この何十年間、実際そうしてきた。それを許してくれた古き良き時代の理学部に大いに感謝している。今の時代は、研究業績と称して、論文の数や引用回数ばかり勘定する。何故もっと中身を見ないのだろうか。ひょっとして、中身を見ても分からないから、数で判断し



ているのかも知れない。悲しいことである。

退職したら、教科書を書こうと思っている。これまでに、地球連続体力学と地震物理学の教科書を書いた。今度は、地球物理データの逆解析とプレート沈み込み帯の地殻変動について書くつもりである。いずれも、これまで研究してきたこと、教えてきたことのまとめである。ただし、締め切りはないから、完成が何時になるかはわからない。

最後に、お世話になった理学系研究科の先輩、同僚、後輩の方々、事務の方々に、心から感謝の気持ちを捧げます。長い間本当に有り難うございました。

松浦充宏先生を送る

井出 哲 (地球惑星科学専攻 准教授)

松浦先生は1978年に当時の地球物理学教室に助手として着任して以来、実に30年以上、地球物理学科から数えると40年以上、東京大学の固体地球物理学を代表する研究者として活躍してこられました。先生は地殻変動・地形形成、地震発生などの自然現象を対象に、とくに地球物理学におけるインバージョン理論の発展に大きく貢献されました。地球物理学の問題はいくらデータがあっても拘束できない劣決定問題であることが少なくありません。松浦先生が開発してきた

パラメーターの先験的情報を利用するベイズモデルによるインバージョン法は、このような問題のモデル推定に威力を発揮しています。現在多くの大学で地震の研究に標準的に用いられている震源決定ソフトウェアにもこの原理が取り入れられ、松浦先生と面識のない学部生や大学院生もその恩恵に浴しているのです。

松浦先生が地震の研究に関わられた約40年間には日本の地震学研究が大きく変化しました。地震予知への希望に満ちた1970年代、懐疑的な見方の台頭とともに1995年の兵庫県南部地震を契機とした方向転換の後、地震を物理学的に理解すべきという時代になっています。松浦先生の「地震発生の物理学」(2002年、

共著)はこの立場からの最初の教科書です。そもそも地震発生物理学という言葉が誰が最初に使い始めたのかは定かではありませんが、本として出版されたのはこれが最初であり、松浦先生を地震発生物理学の開祖とするのは間違っていないでしょう。応力蓄積過程、(粘)弾性法則、摩擦法則を組み合わせて地震現象を理解するという先生の考えに沿って多くの後進が研究を進めています。

先生ご自身も日本全国を対象とした大規模地殻活動モデルを開発するなど、現在も最前線でご活躍中です。今後も研究のみならず固体地球物理学の思想的中核としてのご活躍を期待しております。

ありがとうございました

中田 好一 (天文学教育研究センター 教授)

「ほんとにお前はおっちょこちよいだね」というのは昔から言われ続けてきた言葉で、莊重や肅々という言葉にはこれから先も縁がなさそうである。学生時代の私もその伝で生活の心配をする時代は終わったと根拠もなく信じていた。友人は、「食べる心配がなくなると、暇になって皆が政治に参加するようになるんだ」と私の洗脳にやっきになっていた。毎日デモをするからデモクラシーという駄洒落にそう違和感のなかった時代である。

夜、山の中で焚き火をしながら仲間に、「お前何するの?」と聞いたら、「俺は天文」と言われ、何だかよさそうに思えて一緒に天文学科を志望してしまった。その頃の天文の先生方は午前中はまず姿を見せることがなく、研究室の窓とドアを開け放して机に向かう様子は食べる心配のない時代の過ごし方として理想的に見えたのである。

呑気だったのは当人だけでなく、祖父は私が三十歳を越える頃、周囲に、「おい、好一はいつ経済に移るんだ?」と聞いたそう。大学というところはまず天文学のように非生産的なことを勉強して、それからお金儲けの学問をするのだと理解していたらしい。お陰で家業の鉄スクラップの道には入らずに済んだが、今でもクズ鉄置場の酸っぱい匂いがすると、あったかもしれない世界に迷い込みそうな気がする。

そんな風にして入った天文学の世界はどこへ行ってもそうそうたる権威がいて、劣等感がすくすくと育つには往生した。しかし、私が何も知らないことを周囲は皆承知で、知らないことを知っていることを知られないように労わってくれたらしい。労わられたということでは在籍した天文学教室でも、天文センターでも、事務の方々にはお世話になりっぱなし



であった。大学の隠れた役割のひとつに、生活能力の低い人間を隔離収容するというのがあるのかと思うほどによく面倒を見ていただいた。天文センターでは研究生の後半を木曾観測所で過ごしたが、日常生活と研究生生活が入り組み、職員の皆さんと合宿を続けているようで楽しい毎日を過ごさせていただいた。

顧みると、三十年前に疑問に思った事が自分にとってはいまだに疑問のままである。進歩のないことおびたしい。この先ひとつでも「あっ、そうか!」という事に巡り合えるよう一層勉強に励みたい。

中田好一先生を送る

田辺 俊彦 (天文学教育研究センター 助教)

中田先生、これまでの御指導、たいへんありがとうございました。私の前にも後にも(先生より年上の方も含めて)中田先生に感謝したい人間はたくさんおりますが、所属が同じということで代表してお礼を申し上げます。その理由をここに記すことで、送る言葉とさせていただきます。字数の関係で、中田先生の研究上の御業績を記すことができないのは残念です。

先生は、いつも根本原理を問題にされてきました。普通の人間が、ただそのまま前提として受け入れてしまう自然科学

(のみならず人間の活動全般に関して)の常識について常に洞察を加えられ、疑問を投げかけてこられました。ああ、こういう人間が世の中を変えるのだと感銘しました。それが他の研究者に影響を与え続けてきたものだと思います。先生のたいへんユニークな点は、アイデアに富んでおられ、面白い研究テーマ、問題を思いつかれますが、それをご自身で研究することで解明するのではなく、若い研究者に与えて研究をさせてしまうところ。そしてまたご自身は、別の問題を考え出すという具合です。驚くべきは、ご自身の専門分野のみならず、さまざまな分野の問題を考えつかれることです。いや専門分野は天文学全般という方が適切でしょう。このようにして何人の研究

者が「そそのかされて」、中田先生の知的好奇心を満足させていることでしょうか。

このようなことが可能なのは、ひとえに中田先生のお人柄にあります。恐らく東京の下町育ちのせいでしょうか、先生は飾るところがまったくなく、謙虚で穏やかなお人柄、どんな人にも対等に、というよりむしろへり下って接せられます。あたかもその明晰な頭脳を完全に隠すことを最大の楽しみとしているかのようです。このようなお人柄のため、分野を問わず、多くの若い研究者が絶えず先生に助言を求めてきましたし、そのたびに、知恵とアイデアを与え続けてきました。本当にありがとうございました。先生のこのユニークなスタイルをこれからも存分に発揮されることを願います。

東京大学を去りゆくにあたって

吉村 宏和（天文学専攻 准教授）

東京大学を去りゆくにあたって「知の頂点をめざして」の意味を考えている。知の頂点というものがあるのだろうか。知の頂点がありそこに立つことができたとしたら、その先にはなにもないではないか。知は無限ではなかったのか。知の頂点ということが世界最高の学府を意味するとしたら世界最高ということがあるのだろうか。知は無限の多様性をもっているのではないか。無限の多様性に一次元の序列をつけられるのであろうか。世界の中で知の探究の最先端を走るというのであれば世界と協調することが大切ではないか。世界最高峰をめざすと言っている大学と世界は協調するであろうか。

私は東京オリンピックが開かれた1964年に東京大学に入学し、それ以来ずっと東京大学に所属してきた。大阪で日本万国博覧会が開かれた1970年には修士課程を修了し、博士課程に進学した。大阪万博のテーマは「人類の進歩と調和」だった。1973年から1974年の一年間

は米国コロラド州ボルダーの研究所のAdvanced Study Program Fellowとして自由な研究ができた。1974年から1975年にはカリフォルニア州パサデナの天文台でCarnegie Fellowとして、またカリフォルニア工科大学の研究者として世界の先端をいく研究者と友人となることができた。1977年から1978年の一年間にはふたたびボルダーの研究所。1982年には中国科学院との共同研究。1983年にはパリ天文台とニューメキシコ州の天文台。1986年から1988年の二年間はアラバマ州のNASA/George C. Marshall Space Flight Centerの研究所で自由な研究ができた。1999年から2005年には科学技術振興機構のプロジェクトの研究代表者としてインド、英国、米国の研究者がいに真剣に研究という知の探究に携わっているかを見ることができた。

そのような私には知の頂点というものはなく知の探究をする人々は世界中のいたるところにいて、その人たちと共同して無限



に広がり無限の多様性をもつ知とともに探究する喜びのみがあるように思える。

ロケットをつくり宇宙探査船をつくり計算機をつくり望遠鏡をつくり研究組織をつくって高速インターネットで世界中を結び知の探究に喜びを感じる人々の活動に参加することができて幸せであると思っている。

東京大学の学生にはエリート意識が薄らいでいるという嘆きを聞くことがある。私は東京大学を去りゆくにあたって、東京大学が明治開国以来の世界の列強に対抗して世界の第一等国になるという過去の精神性から脱却して、真のエリートとは何かを世界の人とともに新たに考え行動してもらいたいと願っている。

吉村宏和先生を送る

柴橋 博資（天文学専攻 教授）

吉村先生は一貫して太陽の磁場活動の源泉、延いては天体磁場の起源の研究をされて来られました。太陽黒点の出現頻度が11年周期で変動する事は19世紀半ばに気付かれましたが、100年程前には太陽黒点のスペクトル線に磁場に因る影響が見出され、黒点は強い磁場の現象である事が判明しました。その後、太陽磁場の極性は22年周期で反転する事もわかり、より長期の変動も明らかになっています。太陽磁場は何らかの機構で作られかつ維持され、この様な変動をしている訳ですが、先生は太陽対流層の微分回転と太陽全面を覆う様なグローバル対流に因ってこれらの現象を説明する理論を構築され、数値シミュレーションと観測との比較による実証的な研究により、大きな成果を挙げられました。

数値シミュレーションでは、情報基盤

センターの前身である大型計算機センターや当時最速のコンピューターを駆使され、華々しい成果を挙げられました。太陽磁場の周期的活動は黒点の出現緯度を時間の関数として表すと羽を広げた蝶の様に見える事から蝶型図とよばれる図で顕著に表現できるのですが、先生の初期の研究では、理論計算から求めた蝶型図を、印字記号を巧みに使って高速なラインプリンターで描いておられました。そうした図を多数含む先生の論文は、凄みと共に華麗な印象を与え、後輩の私たちに大きな刺激を与えるものでした。過去の文献にも精通され、歴史的文献の引用の点でも刺激の多いものでした。

太陽の磁場活動の周期が22年であるからには、何世代にも亘る観測データの収集が重要になります。先生は観測やアーカイブデータの収集と解析にも尽力されました。世界中で継続的に得られた過去100年間に上る写真乾板に記録された黒点データを高精度にデジタル化する事業は特筆されるべきものです。精度を重視する為に、特許も幾つか取られた独自の

装置も作製なさっています。

もうひとつ、研究遂行に必要な事には先生自ら精力的に活動されて来られた例を挙げておきましょう。今から20年余前に日本と米国との間に光ファイバー網の敷設が開始され、米政府はこれを使って日米の研究機関を高速回線で繋ごうとしていました。が、当時のKDDは不特定多数の利用者に単一契約で使用を許すことには消極的で、研究者にも懐疑的な方々がおられました。先生はKDDを説得なさり、米国と東大を個々の利用者の経済負担なしにネットワークで結ぶことに成功されました。理学部の諸先生、とくに有馬朗人先生のご理解とご支持があったと伺っています。この画期的ネットワークは東大国際理学ネットワークとして発展して、日本に於けるインターネットの基礎となりました。この恩恵を受けて多くの研究が効率良く遂行された事は長く記憶されるべきでしょう。

吉村先生のご健康と一層のご活躍を祈念すると共に、今後もご指導ご鞭撻を賜りたく思う次第です。

臨海実験所と私

佐藤 寅夫（臨海実験所 助教）



学部学生として生物学科動物学課程に進学してきて以来、理学部には実に長い間お世話になりました。最初に就職したのは2号館隣の総合研究資料館（現総合研究博物館）で、その2年半だけ理学部を離れましたが、昭和51年4月に臨海実験所に助手として赴任し、そのままいつの間にか今日に至りました。私は大学院入学時に動物学教室で伝統のある魚類分類学を専門として選び、それ以来好きなこの分野で思うように仕事をさせていただきましたが、臨海実験所では魚以外にも多くの動植物に親しむことができました。

私は子供のころから動物が好きで、海辺にいた時は貝殻を集め、海から離れてからは昆虫採集をし、また図鑑や記録映画を見ることに夢中になって過ごしました。動物学課程に進学して間もない6月に臨海実験所で動物分類学実習があり、江上信雄先生の指導のもとで海辺のさまざまな環境からさまざまな動物を採集し

ましたが、これは私にとって衝撃的に楽しい経験でした。種類数が多いだけでなく実に多様なものが採れ、それまで図鑑でしか見たことがなかったもの、あこがれていたものの実物を次々に観察し、スケッチすることができました。子供のころ親しんでいた貝も、当時は貝殻しか知らず、もっていた図鑑も専ら殻だけを示したものでしたが、この実習中にはその生きた姿を見ることができ、軟体部は通常貝殻とはかけ離れた色彩をもち、美しいものが多いことを知りました。木村武二先生と川島誠一郎先生に明け方日の出前に起こされ、プランクトン採集に連れて行かれましたが、プランクトンの膨大な世界にもこの時初めて触れました。

その9年後臨海実験所に居を移してからは、後輩たちの臨海実習に参加することで常時この体験をくりかえすことができるようになり、本当に幸せに過ごすことができました。実習で採れる動物の種類は毎回かなりの変動があり、私たちの

実習の時は当たり年であり、あれほどには見られない年があることもわかりました。また、年による変動以外に、長年の間に明らかに減ってきたと思われる種も確かにあります。それでもこの動物相の豊かさは依然圧倒的であり、誰にとってもここでの分類学実習は海における動物の進化を体感できる貴重な経験になると思います。この海、そして臨海実験所はこれからも大切に守っていききたいものです。

私はまだしばらくは研究生活を続けていきたいと思っています。臨海実験所ともどもこれからもよろしく願いいたします。

佐藤寅夫先生を送る

赤坂 甲治（臨海実験所 教授）

佐藤寅夫先生は、33年の長きにわたり一貫して三崎臨海実験所を拠点として魚類の分類、系統に関する研究をされました。私は三崎臨海実験所に赴任してからこの5年間、佐藤先生と共に臨海実験所の運営・教育に携わって参りましたが、新参者にとっては歴史のある三崎臨海実験所について知らないことも多く、長年の出来事に通じておられる佐藤先生に度々助けていただきました。

臨海実験所の主要な使命のひとつに、多様な海洋生物を実験材料として提供することが挙げられます。一般の研究者は文献の上では種を理解していても、実物を知らないことが多々あります。また、似て非なる種もあり、野生生物種を実験材料にするには種の同定が不可欠であります。佐藤先生は魚類ばかりでなく、世界一の生物相を誇る三崎周辺海域の動物、海藻から草木に至るまで幅広い知識をお持ちで、多様な生物種を研究対象として共同研究を行う外来研究者にとってなくてはならない存在でした。臨海実験所のもうひとつの使命に、教育があります。三崎臨海実験所では、本学の学生ばかり

でなく、多数のほか大学の学生も分類、系統進化、ゲノム解析の実習を行います。また、子供たち、教員、一般市民向けの自然観察会も多数開いており、佐藤先生はそのほとんどすべての実習に立会い、採集される多様な生物の分類・講義を担当されてきました。理学系研究科の社会貢献にもっとも活躍された先生ともいえるでしょう。4月からは、長期にわたって収集された膨大な数の標本の分類・整理を、外来研究者として続けられると伺っております。今後も若き系統分類学者のアドバイザーとして、三崎臨海実験所で活躍されることを期待しております。

菊池淑子先生を送る

米田 好文 (生物科学専攻 教授)

菊池先生は、本学部生物化学科を昭和43年3月卒業されました。同大学院に進学され、医科学研究所の故内田久雄先生の元で博士課程まで在籍されました。外国留学の後、慶応大学、東邦大学を経て、平成2年7月に生物学科の助教授として赴任され、所属と職の名称変更の後、現在に至ります。

大学院生の頃から生化学の秀才として下の学年にも有名でした。分子生物学においてself-assembly概念が華やかになりし頃、留学中にT4バクテリオファージの形態形成で次々と重要な論文を発表されたの

はまだ記憶に新しいところです。

東大赴任後は、慶応大学で開始された実験生物酵母を用いた分子遺伝学の研究と教育にあたられました。酵母の細胞周期、そのG1期よりS期への移行における細胞増殖制御とSSD1/SRK1/SSI1/MCS1遺伝子の関連の研究やユビキチンリガーゼの分子多様性、ユビキチン化と細胞周期との関連の研究で世界に伍してこられました。さらにSUMOタンパク質の研究に発展してきました。SUMOタンパク質(SUMO protein)とは、Small Ubiquitin-related (like) Modifierの略です。SUMO化につき、酵母で初めてその標的タンパク質を同定し、さらにそれに必要なSUMOリガーゼを発見されました。当時、in vitro系でSUMO

conjugating enzymeが直接、標的をSUMO化できたために、SUMOリガーゼは存在しないのでは?と思われていたので、世界を驚かせた特筆すべき成果です。

現在、男女共同参画が唱われ、女性教員が増加し始めていますが、その前から赴任してこれ、植物学教室の貴重な女性教官(当時)として重要な委員などを務めていただき、感謝しております。秀才らしく、研究内容もきちんと理論立てて行われ、酵母のパラダイムに最適な研究者だと拝見しておりました。授業も秀才らしいきちんとしたものだと伺っております。またその資質は、大切なお嬢様にも遺伝しているように思います。

今後ともお元気でご活躍を祈念しております。

加藤邦彦先生のご退職に寄せて

久保 健雄 (生物科学専攻 教授)

加藤邦彦先生は1976年に本学部生物学科の旧放射線生物学講座(現在は細胞生理化学研究室)に助手として奉職されました。1984年にはRG Cutler博士の研究室(米・国立加齢医学研究所)に留学され、その後も長く親交を続けられました。研究では魚類の培養細胞を用いて光回復と除去修復の関係について研究された後、個体レベルの老化研究に進まれました。初めはメダカ、後にはマウス

を用いた研究に従事され、食事量(カロリー)と寿命の関係について個体レベルで解析をされました。1994年には細胞を用いた研究から、お茶の粗抽出成分に染色体変異を抑える作用やX線による形質転換を抑止する作用があることを報告されました。また「老化探究・ヒトは120歳まで生きられる(読売新聞社)」、「スポーツは体にわるい—酸素毒とストレスの生物学(カッパ・サイエンス)」などの著書を出版され、活性酸素には寿命短縮効果があることや発ガン促進効果があること、したがって酸素を多く消費する運動をする際にはビタミンCなど活

性酸素抑制効果があるものを摂取すると良いことなど、一般向けに活性酸素の生物学的影響をわかり易く解説されました。

教育においては、長年にわたり非密封放射性同位元素の安全取り扱いと液体シンチレーションカウンターを用いた放射線測定に関する実習を担当され、生物学科動物・植物学両コースの多くの学生の教育に当たられました。独自のご研究を推進され、熱意を込めて教育に当たられた加藤先生のご退職は当学科にとりましてもたいへんに残念なことです。退職後もどうか健康に留意され、ますますご活躍されますようお祈り申し上げます。

基礎研究の一翼を担って40年

佐伯 喜美代(化学専攻 技術専門員)

昭和42(1967)年6月、技術職員として化学教室(有機元素分析室)に採用されました。はじめの2ヶ月は元素分析の基本である重量法(プレーグル法、デュマ法)を特訓していただきました。冷房の無い時代(6、7月は高温多湿)で水素の分析値が高く出るため許容誤差内のデータを得るため苦労した事がなつかしく思い出されます。

その後、熱伝導度法によるヤナコMT-1型装置を使っての分析が始まりました。この装置は吸収部に難点があり、改良されてMT2になりました。その後MT-3(つなぎで5ヶ月)、MT-5、MT-6

となり、どの装置も10年以上使いこなしそれぞれ分析のための検討や工夫等を重ねてきたので愛着があります。また有機化合物、金属錯体化合物、フラーレン化合物、触媒、光触媒化合物等先端の研究を推進していく、東京大学でしか経験のできない微量分析業務の仕事をしていただきました。その間大学紛争や国立大学の法人化等、その中で働いていなければ理解できないようなさまざまな体験もしました。このような仕事を通しての体験は私の人生の宝となることを確信しています。これまで多くの先輩や教職員、研究者、大学院生の皆様にたいへんお世



話になり感謝申し上げます。

最後に理学系研究科の今後の発展とご健勝をお祈りいたします。

37年間ありがとうございました

小澤 みどり(研究支援・外部資金チーム 主任)

お茶の水女子大学卒業を目前にした昭和47年2月に雙葉高校で生物を教えてくださいました水野丈夫先生のご紹介で動物学教室の寺山宏先生の秘書になり、昭和57年4月、故福島直先生のお誘いで地球物理研究施設に移って、共通秘書として勤務いたしました。平成5年4月、職場の同僚と当時学部長の久城育夫先生の後押しで教務職員に採用されて広域理学事務センターを担当し、同時に初期宇宙研究センターおよびビッグバン宇宙国際研究センターの事務も

させていただきます。平成14年4月に研究協力係(現在の研究支援・外部資金チーム)に移り、平成16年4月、法人化のさいに教務職員から主任になって現在に至り、日本学術振興会の各種事業およびバイオサイエンス関係を担当しています。

37年間、先生方や同僚等に恵まれて、温かい環境で無事に勤めてこられましたことを感謝いたします。また、家で支えてくれた母と兄(情報基盤センター元教官・小澤宏)に感謝いたします。



これからは再雇用として勤務させていただきますので、引き続きよろしくお祈り致します。

停年に際して

私の公務員生活は千葉大学を皮切りに、東京大学庶務部・薬学部・農学部附属演習林、そして理学部の40年にわたり、理学部では情報科学科、事務部経理掛、植物園の22年になります。

大学行政事務は教官と学生の橋渡しが主体ですが、最後の職場となった植物園は一般公開の関係上、入園者とマスコミとの対応が他部署とは違い顕著でした。

神田 博道（植物園 主任）

植物園での13年のうち記憶に残る出来事が、①イチョウ精子発見記念行事。②日光分園百周年記念行事。③天皇皇后両陛下の行幸啓に携われたことです。心残りは元気な姿で停年を迎えられなかったこと。心筋梗塞による闘病生活の中、皆様方のご理解・ご尽力によりこの日を迎えることができました。この場をお借りして上司、先輩、友人の方々にお礼を



申し上げますと共に、皆様方の益々のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

退職を迎えて

私は、昭和42年（1967年）に理学部附属臨海実験所に技能補佐員（非常勤職員）として採用され、後昭和44年に文部技官として採用され、現在に至ります。

当時、臨海実験所では、水族室、標本室が一般公開されており、最初の業務は、それらの維持管理が主な仕事でした。動物飼育の始まりでした。しかし、水族室は、諸事情により昭和47年に閉館されました。

関本 実（臨海実験所 技術専門職員）

色々苦勞も多かったですが、いまでは良い体験になり、色々思い出されます。

その後は、現在の業務でもある実験研究用動物の採集、飼育、臨海実習の補助などが主になりました。また、近年は、一般参加者向けの自然観察会なども増え、船舶操縦の機会も多く、航行時は常に安全第一に心がけ、幸いにも本年まで無事故で迎えられることに安堵感と喜びを感じております。



最後に、臨海実験所の益々の発展と教職員の今後の御活躍をお祈りいたします。ありがとうございました。

この他にも1名の方が定年退職されます。長い間、どうもありがとうございました。

大崎 敏子（生物科学専攻 技術職員）

人事異動報告

所属	職名	氏名	異動年月日	異動事項	備考
地惑	准教授	井出 哲	2008.12.16	昇任	講師から
物理	助教	渡利 泰山	2008.12.31	辞職	数物連携宇宙研究機構特任准教授へ
物理	助教	安東 正樹	2008.12.31	辞職	京都大学大学院理学研究科特定准教授へ
化学	助教	西野 智昭	2008.12.31	辞職	大阪府立大学21世紀科学研究機構講師へ
原子核	助教	岩崎 弘典	2008.12.31	辞職	ケルン大学原子核研究所フンボルト研究員へ
地殻	特任講師	小松 一生	2009.1.1	採用	
原子核	助教	川畑 貴裕	2009.1.31	辞職	京都大学大学院理学研究科准教授へ